

目賀田種太郎展の記念講演会と 今村力三郎生誕150年記念展について

専修大学法科大学院教授 松岡啓祐

一 はじめに

平成28(2016)年には、専修大学140周年記念事業として数多くのイベントが行われた。そのなかでは、今村法律研究室が、いくつかの役割を担うことになっている。そうしたイベントのうち、とりわけ重要なものと思われるのが以下の、目賀田種太郎(めがた たねたろう)と今村力三郎(いまむら りきさぶろう)の二人に関する記念イベントであった。これらは、まれに見る大規模なイベントということができ、後世に残るものと評価することができる。具体的には、第一は、「目賀田種太郎と近代日本展の記念講演会」であり、「たばこと塩の博物館」において行われた。第二は、「今村力三郎生誕150年記念展」であり、神田・生田の両キャンパスを中心に実施された。それぞれ今村法律研究室が主催したものであるが、大学自体の記念イベントであり、大学の関係各所や外部の機関などとの大きなコラボレーション企画として、大いに盛り上がりを見せた。

こうした記念イベントの具体的な内容については、当然のことながら、専修大学の総務部大学史資料課、校友会や図書館などの方々が多数関与されており、各部署でそれらの記録を採られていることと思う。ただ、各機関は相互に密接な協力関係にあるとはいえ、それぞれの役割が分担されている別個の独立した組織である。必ずしも相互に横断的な情報共有がなされているわけではなく、また、今村法律研究室自体も大学内部の独立組織の形をとっており、固有のミッションがあるため、研究室内部における室員に向けて、室員相互の情報共有も必要である。室員には弁護士の方々をはじめ、現在、専修大学の内部に所属しない方々も大勢おられる。そうした方々にとって、目賀田種太郎先生や今村力三郎先生はあまり馴染みがなく、記念イベントの意味自体わかりづらいかもしれない点にも留意して、以下の説明をしていきたい。

そこで、本稿は、今村法律研究室として主催した講演会や記念展について、簡潔なものではあるが、広く室員にその状況を紹介したい。私自身の備忘の意味も込めて、後世に記録を残しておくことを目的とするものである。なお、本稿の記録の多くは、私個人の持っている限られた情報からなるものである。それゆえ、感想などはあくまでも私個人が見聞きしたなかから感じたものであり、必ずしも客観的なものになっていないかもしれず、細かい誤りやミスもありうる点はお断りしておきたい。

二 目賀田種太郎先生と今村力三郎先生について―簡潔な紹介

1. 目賀田種太郎先生について

「目賀田種太郎と近代日本展の記念講演会」は前述のように「たばこと塩の博物館」において行われた。目賀田種太郎（1853～1926年）先生は、どのような人物であったのであろうか。目賀田先生は、専修大学の創立者の一人として著名であり、東京音楽学校（現在の東京芸術大学）の創立にも関与した。幼少の頃から神童として名高く、1870（明治3）年にアメリカのハーバード大学に留学されている。さらに、一度帰国した後、再度渡米し、1879（明治12）年に帰国した翌年の1880（明治13）年に専修大学の前身である専修学校を創立している。勝海舟の談話等でもその大変さが今に伝えられているところではあるが、当時交通手段も乏しいなか、遠いアメリカまで、よく2回も行かれたことと思う。

当時の日本人の留学先は、アメリカが多かったとされる。アメリカは日本の開国の先駆けであり、友好的であったことに加え、急速に発展し始めた新興国であるアメリカの方がすでに完成された資本主義国家であったイギリスやフランスよりも、日本にとって学ぶにふさわしいと考えられたことが理由であった（専修大学の歴史編集委員会編『専修大学の歴史』37頁〔青木美智男〕（平凡社、2009年））。

目賀田先生は、大学においていくつかの法律科目の講義を担当し、教育者・法律家として活躍された。また、司法省附属の代言人でもあり、東京代言人組合（現在の東京弁護士会）の会長も務めた人物である。目賀田先生は、ほかの3名の主だった専修大学の創立者である、相馬永胤（彦根藩士、コロンビア法律学校・エール大学大学院に留学）・田尻稲次郎（薩摩藩士、エール大学・同大学院に留学）・駒井重格（桑名藩士、

ラトガス大学に留学)とは異なり、幕臣であったという特長を持つ。

その一方で、帰国後には、大蔵省主税局長を務め、大蔵官僚として後で触れるようにわが国の近代的な税制度の確立に多大な貢献もしている。法的な資質に加え、相当の経済的なセンスを兼ね備えていたのであろう。その後、貴族院議員や枢密顧問官にもなっている。展示会では、その人物像が家族を含め、かなりリアルに紹介されており、興味深い。

2. 今村力三郎先生について

今村力三郎(1866～1954年)先生については、言うまでもなく、専修大学の元総長であって専修大学の発展に大きな功績があった人物である。前述した目賀田種太郎先生とは異なり、専修大学の創立者ではないものの、専修大学(正確にはその前身の専修学校)に在学中に代言人(現在の弁護士)試験に合格後、大学を首席で卒業された。

そして、今村先生は若干の判事の時期を経て、その後は一貫して在野にあって、刑事弁護人として大逆事件や五・一五事件に加え、神兵隊事件、帝人事件等といった戦後の日本を代表する著名な事件を次々と扱われている。いわゆる「花形弁護士」の一人に数えられるようになったとも言われる。なお、民事関係の活動として、今村先生は会社の顧問弁護士なども若干ではあるが、行われていたようである。

今村先生は1920年の54歳の時に、学校法人専修大学の評議員になられていたが、その後学内が混乱するという状況のなか、学生や周囲の関係者からの要請を受ける形で、今村先生が総長に就任されたのは実に、1946年の80歳の時である。大学が資金難で苦しい状況に陥ると、都内の自宅を売って多額の寄付をして、大学の危機を救って頂いた。その後は、学内の建物の一室に住まれ、生涯を終えたとされる(そうした点も含め、信濃毎日新聞2014年3月2日朝刊(日曜日)の特集記事「飯田が生んだ反骨の弁護士」も参照[鈴木宏尚氏執筆])。

そうした偉大な業績の顕彰と大学教育への反映こそが今村法律研究室の中心的な事業活動であり、現在までのミッションとなっている。その代表的な活動として、毎年『今村力三郎の訴訟記録』を刊行している。特に今年度は後に述べるように、今村先生の生誕150年記念として大学において大々的なイベントが行われているところである。

そのパンフレットには、大きく『『反骨』の弁護士』との紹介がなされ、今村先生が好んだ言葉として、「履正無畏（ただしきをふんで、おそるることなし）」という文字が筆文字で味わい深く表現されており、とても印象的である。この言葉には、「自らが正しいと信じた道を、畏れることなく勇気をもって進みなさい」という意味があり、まさに「反骨」の弁護士としての生き方を示していると紹介されている。今に生きる私達も、勇気づけられる言葉であろう。

三 講演会の概要

1. 記念イベントの概要—講演会と展示会

平成28年10月8日（土曜日）に、東京スカイツリーのそばにある「たばこと塩の博物館」において今村法律研究室の主催で「目賀田種太郎展と近代日本展の記念講演会」を開催した。同年9月17日から11月6日にかけて同館2階特別展示室で行われている、専修大学140周年記念事業の「目賀田種太郎と近代日本——教育者・法律家・官僚として」というイベントの一環である。前述のように、目賀田種太郎は専修大学の創立者の一人であり、教育者・法律家のみならず、大蔵官僚としても大きな活躍をしている。明治13年の専修大学のスタート時は、主に仕事が終わった後の夜間に講義が始まっていた。そして、日本語で法律や経済を講義するというのは、



目賀田種太郎と近代日本展（会場「たばこと塩の博物館」にて）

専修大学がトップバッターとなっている（日高義博『学問と人生——日高義博学長講演録Ⅱ』20頁以下（専修大学，2009年）を参照）。他の大学では，主に外国語を使って講義していたのであった。

そうした目賀田種太郎の記念事業としては，2階の特別展示室で行われた展示会が重要である。同展示会では，「留学中の目賀田種太郎の写真」や「在米中の目賀田種太郎が投稿した論文」のほか，「五大法律学校と呼ばれた各学校の講義録」など専修大学の創立者の一人である目賀田種太郎の人物と業績に関連する，様々な日本の近代化の過程における貴重な文書が展示されていた。また，目賀田種太郎の家族の紹介などがなされており，大変親しみやすい内容であった。さらに，専修大学創立時の福沢諭吉との関係を示す展示や，勝海舟が専修大学の卒業生に送った書なども目を引いた。

2. 「目賀田種太郎と近代日本展」と各種イベントの開催状況

そのように「目賀田種太郎と近代日本展」は「たばこと塩の博物館」の2階特別展示室をメイン会場として展開された。その展示に際しては，それと同時に，専修大学図書館コレクション展も開催され，「七夕そうし」や「南総里見八犬伝」など色鮮やかな江戸時代の絵巻物が多数展示されるなど華やかなムードが演出されていた。

そしてまた，その開催期間中には，多岐に渡るイベントが大々的に多くの人々を集め，同時並行的に展開された点が重要である。お忙しいなか，多くの時間をかけて，準備して行って頂いた諸先生方には深く御礼申し上げる。

そうしたイベントの第一が，3回に渡る関連講演会である。第1回目は，長沼秀明・川口短期大学こども学科准教授により「目賀田種太郎の洋学と洋学」というテーマで，第2回目は牛米努・中央大学兼任講師により「大蔵省主税局長，目賀田種太郎」というテーマで，それぞれ素晴らしい講演が行われた。そして私が司会を務めさせて頂いた，今村法律研究室主催の「目賀田種太郎展の記念講演会」は理事長を招いた，それらの関連講演会の総仕上げともいえるべき最後の回に位置付けられる。

第二が，関連シンポジウムである。法律学校研究会を討論者として，「明治期における神田五大法律学校の意義と役割」というテーマで実施された。開催場所は3階の視聴覚ホールであった。

第三が、3回に渡るギャラリーにおけるトークイベントである。瀬戸口龍一氏(専修大学大学史資料課)により「目賀田種太郎と専修大学」、板坂則子・専修大学文学部教授により「専修大学図書館コレクション展の紹介」、鎮目良文・たばこと塩の博物館学芸員により「目賀田種太郎とたばこ専売制」というテーマで、それぞれお話が行われた。

その第四が、「たばしお講座」である。この講座においては、田原昇・東京都江戸東京博物館学芸員により「幕末、本所の旗本たちの生活」というテーマと、井上幸孝・専修大学文学部教授「植民地時代メキシコの先住民記録に見るアステカ文明像」というテーマ、という2つのテーマの下、その学習活動がなされた。

3. 記念講演会の概要

「目賀田種太郎展の記念講演会」では、日高義博理事長(専修大学法科大学院教授)により「明治期の専修学校における法学教育とその成果——目賀田種太郎と今村力三郎を中心に」という題で貴重なお話をされた。そして、私が室長として力不足ではあるものの、司会役を務めさせて頂いた。その講演内容そのものについては、後に理事長の講演録などの形で公表されるのではないと思われるため、以下においては、当日の状況などを簡潔に記すに止める。

この講演会は、「たばこと塩の博物館」の3階にある「視聴覚ホール」で行われた。目賀田種太郎は大蔵官僚として、たばこ専売制や営業税などの近代税法の確立に尽力しており、そうした経済分野での活躍において、「たばこと塩の博物館」とは大きな縁があった人物であったようである。そこで、この講演会も同博物館で、その全面的なサポート体制の下で円滑に行われることになった。そうした専修大学とのつながりも、意義深く感じたところである。

4. 記念講演会当日の様子

記念講演会が行われた当日の天候としては、一時強い雨も降るなどといった日であった。しかし、講演会の後に外に出てみると雨も上がり、明るい陽射しも若干見え、きれいな夕焼けも一部観察できたようである。近くには巨大な東京スカイツリーもあり、記念式典にふさわしい場所であった。

「たばこと塩の博物館」の「視聴覚ホール」の定員は90名と、比較的小規模な室内であり、講演を行う側と聴衆の側の距離は近いものであった。講演会は新聞広告などの効果もあり、びっしりと座席は埋まり、ほぼ満員の大盛況であった。日高先生が用意された緻密なレジュメと、それに関する丁寧な解説・講話に、聴衆の方々はきわめて熱心に聞き入っていたという印象がある。私も初めて聞くことも多く、大変勉強になった。明治期の法学教育の目新しさや当時のカリキュラムの内容等は専修大学のみならず、各大学それぞれが工夫をしていたことであろう。

この記念イベントの開催会場となった「たばこと塩の博物館 (TOBACCO & SOLT MUSEUM。『たば塩』と略して称されている)」は日本専売公社（現在の日本たばこ産業株式会社）によって昭和53年に渋谷の公園通りに開館されていた。そして、そのスペースが手狭になったことなどから、昨年（平成27年）に渋谷から墨田区に移して新しくオープンしたばかりであった。

そのため、その館内はどこも大変きれいで、広々とした空間のなか種々のモニュメントも工夫され、見どころ満載であった。記念講演会の開催に当たっても、スタッフの方々からきわめて親切な御協力を頂き、ここで開催できて良かったという感想を持った。

5. 記念講演会当日の進行状況等

次に、記念講演会当日の進行状況は次のようなものであった。13時15分に「たばこと塩の博物館」に集合して、当日の大まかな打合せが行われた。そして、13時45分に3階の視聴覚ホールが開場された。14時00分に、今村法律研究社の現在の室長である私の方から、挨拶をさせて頂いた。そのなかで、今村法律研究所の概要と日高先生（以下適宜、日高理事長ともいう）の経歴を紹介し、あわせて今年度が今村先生の生誕150年に当たり、記念行事が大々的に行われていることもその後の講演の重要な伏線として紹介している。

いよいよおよそ14時10分から、日高先生に前述のように、「明治期の専修学校における法学教育とその成果——目賀田種太郎と今村力三郎を中心に」というテーマで御講演をして頂いた。明治期の法学教育というきわめてハイレベルなテーマであったが、日高先生はあらかじめ大変緻密なレジュメを作られており、準備万端という

感じであった。また、そのお話の雰囲気も数々の講演会をされた経験もあることから、聴衆の興味を途切れることなく強く惹きつけ、全体の流れもスムーズに進み、名人芸ともいうべきものであった。

そのお話の後、15時10分頃から、ディスカッションの形式へと会場内では、ドラマティックな展開がなされていった。そこで、日高理事長と司会の私の対話という形へと、壇上における席の大規模な配置替えが、職員の方々の御協力の下で速やかに行われた。そのなかで、日高理事長を中心として、目賀田先生と今村先生の社会的役割、または専修大学にとって目賀田先生と今村先生がどのような役割を果たしたのかなどを、さらに聴衆の方々にわかりやすく話させて頂いた。日高理事長のドイツでの留学経験にまつわる貴重なエピソードも、皆の関心を引いた。

その後、15時30分位から質疑応答の時間に移った。講演会に御参加頂いた方から感想や質問もあり、それに対し、こちらからの説明ないし対話等を行った。熱心に講演を聞かれていた方はあらかじめ同館の入口奥の販売場所で資料集等も購入され、その内容を緻密に熟読されており、今回の展示内容を深く学んでいられるようであった。そして、15時45分頃、予定通りに講演会は無事終了した。

参加者の方々に当日に配布された物としては、今村力三郎展チラシと日高先生の作られたレジュメがあった。当日の主な役割分担としては、大学史資料課と「たばこと塩の博物館」の方々により、会場入口において配布物が手渡され、大学史資料課の方々により記録が取られ、また、質疑応答のマイク対応などを行って頂いた。もとより、そのほかにも専修大学の職員の方々が多数出張され、土曜日の学外勤務にもかかわらず、種々の手助けを丁寧にしておられ、深く感謝したい。

四 今村力三郎生誕150年記念展

1. 今村力三郎生誕150年記念展の概要

平成28年には、専修大学140周年記念事業として、今村力三郎の生誕150年記念展も大規模に前期と後期に分けて、通年にかけて精力的に行われた。前期は、同年6月11日から23日まで、神田キャンパス8号館2階の今村力三郎記念ホールを会場とし、多数の展示物を揃えた。

そこでの展示は、以下でも見るように5部の構成に分けられている。その上で、

今村先生の様々な写真や卒業証書等といった貴重な資料、当時の専修大学の状況を紹介する種々の資料、今村法律研究室の数多くの出版物などを配置した。

毎日相当数の来場者があり、来場者は資料を見るだけでなく、資料課の方々を中心になされた丁寧な解説に聞き入っていた。私も数回その様子を見ていたが、大学の歴史とともに、当時の社会全体の様子や今村先生の人物像がよくわかり、初めて勉強する者にとっても大変興味を持ちやすい工夫が満載されていた。

2. 5部に分けた構成の展示方式

この展示会では具体的に、第1部から第5部までに分けて、今村先生とその業績をわかりやすく紹介している。一括して展示する方式よりも、大きく5部に内容に応じて展示を分けた構成を取ることで、見学者としては、より展示内容がわかりやすくなったものと思われる。

その第1部のタイトルは、「今村力三郎誕生～信州飯田から東京へ～」であり、主にその幼年期の状況に触れている。第2部のタイトルは、「明治期の専修学校～今村力三郎を育てた法学教育～」であり、専修大学の創立時にスポットを当てている。

第3部のタイトルは、「今村力三郎が手掛けた明治・大正・昭和期の大事件」であ



今村力三郎生誕150年記念展

り、数多くの訴訟記録などが展示されている。第4部のタイトルは、「戦後の新たな専修大学の総長・今村力三郎」であり、総長としての活躍を生き生きと紹介している。第5部のタイトルは、「今村力三郎を取り巻く人々」であり、親しい弁護士や家族などとの関係を明らかにしている。こうして今村力三郎本人はもとより、その時代背景や周囲の状況をトータルにクローズアップしているところに、大きな特色が見られた。

3. 神田キャンパスの記念講演会

平成28年6月18日（土曜日）にはこうした展示会に加えて、記念講演会も実施された。この講演会の開催の場所になったのは、神田キャンパス7号館3階の731の大教室であった。この教室では最近よく講演会などが行われている。そこでは、2名の方々に講演をお願いした。

まずは、今村法律研究室の元室長で今村先生に造詣の深い石村修・法科大学院教授により「田中正造と今村力三郎——自由民権運動と関連して」という題で、御講演をして頂いた。田中正造は日本の歴史上の偉人の一人であり、多くの方々にとって馴染み深い人物であろう。そうした田中正造と今村力三郎との関係性を深く掘り下げると、今村力三郎の新たな側面に光が当たることとなるかもしれない。

次いで、作家の長嶺超輝氏により「人の心を言葉で揺さぶるには？——『今、伝説の弁護士に学ぶ』』という題で、御講演を引き受けて頂いた。作家らしい観点からの興味深いお話を聞くことができたと思われる。

こうした記念講演会には、予想を超える多数の参加者が来場し、質疑応答なども行われ、大いに盛り上がった。なお、その記念講演会の実施に当たっては、学生に対するイベントへの参加の呼びかけなど多くの先生方から好意的な御協力を賜った。とりわけ法学部の坂詰智美先生には、当日の運営サポートなど多くの御助力を頂き、深く感謝したい。

4. 生田キャンパス

平成28年の後期における今村力三郎の生誕150年記念展は、生田キャンパスへとその舞台が移されることになっている。同年11月9日から12月3日まで、生田キャン

ンパス9号館1階のエントランスホールを会場としている。

その展示内容としては、前期の神田キャンパスとほぼ同様に今村力三郎に関する様々な資料の展示が行われることになる。本原稿の執筆時にはまだ後期の日程は始まっていないため、その予定を記すに止める。おそらく、室報の出版時には無事イベントも終了していることと思う。

五 結びに代えて—今村法律研究室独自のミッションとの関係性

今年はこのように今村法律研究室としては、イベントの多い、かなり充実した年であった。目賀田種太郎展における記念講演会と今村力三郎生誕150年記念展のいずれも、大学の創立140周年記念事業とタイアップして実施されたという重要な意義を持っている。創立140周年記念事業と生誕150年記念展が重なるとは、興味深いものと言える。

その開催場所についても、神田キャンパスのみならず、生田キャンパスでも行われるといった大学横断的なものであったほか、渋谷区から墨田区に移転したばかりの「たばこと塩の博物館」と大学の外に飛び出して行われたものもあり、とても興味深いものとなった。なお、専修大学法学部では、2019年の専修大学創立140周年を記念し、知の発信として「140回連続講演会」を実施しているところであり、私も平成28年5月13日（金曜日）に担当させて頂いた。

他方、「たばこと塩の博物館」といった学外の機関・公共施設との関係性の拡大という意味では、そうしたトレンドは昨年から今村法律研究室が発行している今村力三郎訴訟記録の刊行にも及んでいる。その一環として、神兵隊事件資料集の続巻である『神兵隊事件 別巻五』の刊行は、平成27年度から始まった茨城県立歴史館とのコラボレーションによるものであり、平成28年度以降も継続することが予定され、発刊作業が活発に進められている。

そうした活動が進んできていることもあり、今村法律研究室のミッションの遂行も幅広いものになってきている。なお、本年10月1日から11月27日までには、長野県飯田市にある「飯田市美術博物館」において、今村力三郎を含む、「田中芳男没後100年記念特別展：日本の近代化に挑んだ人びと——田中芳男と南信州の偉人たち」も開催され、今村力三郎に光が当たることが増えている。

今後も、専修大学の150周年記念、160周年記念と先々おそらく、節目ごとにそうした大規模な記念イベントが行われていくであろうことが予測される。その際には、折に触れて今回の記念イベントなどの前例のプログラムや当日の具体的な実施状況などの様子が参照されることになるであろう。私の室長としての任期も終盤に入り、次の方々にバトンを渡すべきタイミングが近づきつつあるが、本稿で紹介させていただいたように、重要なイベントが次々に行われる重要な時期に、室長を務めさせていただいたことは大変光栄であった。

古き良き伝統ある今村法律研究室としては、こうした活動を今後ますます進化させ、深めていくことが今村力三郎先生を顕彰するという固有のミッションを有する研究室の発展に繋がるものと思われる。それとともに、そうした本研究室の活動が、大学の創立以来の歴史を踏まえた、大学の発展へと還元されていくことこそが大いに期待される。今後、今村法律研究室は専修大学の歴史の積極的な対外的代弁者・発信機関といった役割も担っていくことも考えられ、そうなれば、今村法律研究室の存在価値は発足当初想定していたものをはるかに上回る、光り輝くようなものになるかもしれない。

ただ、ダイヤモンドもその価値を見出す人がいて、さらに継続的に手間をかけて磨いていかなければその価値を発揮することは困難である。それができるかどうかは、ひとえに関係各所の努力と創意工夫にかかっている。本稿は簡潔なものであるが、今後の専修大学の節目のイベント開催時に、関係者により何らかの形で活用されることがあれば、幸いである。